



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サーミ工芸 duodji の現状 : 白樺のこぶから作られるカップに着目して
Author(s)	田中, 佑実; Tanaka, Yumi
Citation	北方人文研究, 18, 91-111
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94484
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_06_91-111_Tanaka.pdf



サーミ工芸 duodji の現状 —白樺のこぶから作られるカップに着目して—

田中佑実
(北海道大学大学院文学研究院)

要旨

Duodji は北方先住民サーミの工芸をあらわす言葉である。この言葉は西洋美術的なパラダイムとは異なるサーミ自身の立場からサーミの工芸を示した言葉であると同時に *duodji* の作り手である *duodjár* によって作られたモノ全般を指す言葉としても用いられている。サーミは主にノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアの4ヶ国にまたがって住む先住民族である。北サーミ語の *duodji* という言葉は、20世紀の制度化を経験しながら西洋美術的な手工芸とは異なる独自の概念として積極的に利用されてきた。本稿では *duodji* と呼ばれる様々な工芸の中でも白樺のこぶから作るカップ、フィンランド語で「*kuksa*/ククサ」に着目し、フィンランドのイナリというサーミ地域での調査から工芸 *duodji* を取り巻く現状を提示する。人類学において、非西洋のモノあるいは先住民のアートの議論は「真正性」の議論とともに展開されてきた。本稿では、フィールドにおける人々の「真正性」の基準から、「ククサ」の素材に着目する。しかし調査から見えてきたものは、「ククサ」の「真正性」を担保するための白樺のこぶが現在のフィンランドの若い森では見つけにくいという現状であった。近代における人々の暮らしと自然の変化が、現代の「ククサ」の制作に結びついている。本稿ではフィンランドのイナリで「ククサ」が扱われている場を描写しながら、「ククサ」を取り巻く「真正性」とそれを支える「自然と文化」のネットワークを明らかにする。

はじめに

Duodji (トゥオッジ) は北サーミ語で工芸品を意味する言葉である。この言葉の原義は「作り物」であるが、フィンランド語やノルウェー語の訳が示すように「手」作りという意味が含まれている(庄司 2020: 66)¹⁾。この言葉は西洋美術的なパラダイムとは異なり、サーミ自身の立場からサーミの工芸を示した言葉であると同時に *duodji* の作り手である *duodjár* (トゥオヤル/トゥオッチャール/トゥオッジャール) によって作られたモノ全般を指す言葉としても用いられている。本稿では、代表的な *duodji* のひとつであり、同時にフィンランドの伝統的な工芸でもある白樺のこぶで作るカップを題材とする。白樺のこぶで作るカップはフィンランド語の「*kuksa*/ククサ」という呼び方が世界的にも浸透しているが、北サーミ語では「*guksi*/グクシ」と呼ばれたり、フィンランド語でこぶのカップを意味する「*pahkakuppi*/パフカクピ」という言葉でより中立的に呼ばれることもある。地域や立場によってその呼び方は変動するが、本稿では世界的にも一般的に使われている「ク

1) 本稿では、*duodji* という言葉はそのままアルファベットで用いるが、日本語を用いる必要がある際には先行研究にならい「手工芸」ではなく原義に近い「工芸」を用いることとする。

クサ」という名前を括弧つきで用いることとする。本稿では、フィンランドのイナリで「ククサ」が扱われている場を描写しながら、「ククサ」を取り巻く「真正性」と、それを支える「自然と文化」のネットワークを明らかにする。

人類学において物質研究は主流な研究のひとつであるが、モノを通して文化的意味を明らかにする姿勢からモノそのものに焦点を合わせ、人に影響を与え、関係を媒介するものとしてモノを捉えるようになったのは1980年代後半以降であった(田村 2013)。この転換の根底には「自然と文化/人間」²⁾の近代西洋に代表される二項対立を問い直す人類学の再帰的な姿勢がある。「自然と文化」の問い直しの波のなかで、意味を付与される器という、モノに対する固定化した見方を問い直す動きが連動しておこった。これまで、交換や流通における商品としてのモノが人間の社会に積極的に関与していることを指摘した人類学者アルジュン・アパデュライの研究や人類学者ブルーノ・ラトゥールに代表されるアクターネットワーク理論、人類学者アルフレッド・ジェルのエージェンシーの議論などによって、アクターとしてのモノと人を含むその他の存在との関係性が描き出されてきた。また、モノが生まれる過程や場に関する民族誌も記述されてきた。モノが作られる過程における素材と人、またはモノと人との関係性に関しては、存在論的議論やモノ自体との関係を扱うアクターネットワーク理論やエージェンシーの理論は有効である。これまでの duodji の研究においても、存在論的アプローチで記述されたものもある (Guttorm 2017)。

本研究の目的は、ものづくりを通してモノと人々を取り巻く世界を眺めることにあり、人類学におけるモノが生まれる場を民族誌的に描く流れに位置づけられる。本稿では「ククサ」が扱われる場を記述するが、そこから見えてくるのはモノと人との間の働きだけではなく、モノの素材に関わる「自然と文化」のネットワークである。本稿では、「ククサ」を通して「真正性」と「自然と文化」の関係性が絡まる状況を指摘する。本研究は、「自然と文化」の問い直しの議論を、ものづくりが行われる場という視点から補強し、人類学における「真正性」と「自然と文化」の議論の接合を試みるものである。作られるモノが周りの文化的状況や自然環境の変化と密接に結びついていることを示したい。

世界各地の先住民の芸術、美術、アート³⁾に関する記述には蓄積があり、日本においてもアメリカ・カナダの北西海岸先住民のアート、アイヌによるアート、オーストラリアの先住民アボリジニによるアボリジナルアートが積極的に研究されてきた。一方、北欧先住民のサーミによるアートあるいはサーミの工芸 duodji に関わる研究は、日本では紹介される機会が少なく、研究としても十分な蓄積があるとは言えない。これまでサーミのアートに関する記述は博物館の展示に伴って制作されたカタログや雑誌を中心になされてきた。前述のアボリジナルアートや北西海岸先住民のアートと比べると、サーミのアートに関する情報は日本において学術的にも共有されていない印象を受ける。本稿は、このような現状を打破するためのステップとなることを目指したい。

本稿ではまず、人類学の系譜における非西洋のモノまたは先住民アートとその「真正性」に関す

2) 本稿で「自然と文化」に括弧を付けているのは、今日の人類学の学術の流れにおいて、この二元論を問い直す動きが起こっており、自然と文化は切り離すことはできず密接に関わり合っていることを示すためである。

3) 先住民がつくる装飾的なモノを示すカテゴリーとして、これまで「芸術」、「美術」、「アート」という言葉が用いられてきた。本稿では芸術と美術を基本的には分けず、両方を含むアートという言葉便宜上を用いるが必要に応じて分けて用いる。しかし今日のサーミ社会が目指しているのは、西洋美術史的なアートとは異なるサーミ独自の概念を用いてサーミが作り続けてきたモノを捉えることである。

る議論を概説する。その中で、サーミのアートがどのように先住民アートの議論の中に位置づけられるのか、また先住民アートを含め人類学において「真正性」を問うことがいかなることかを記述する。次にトナカイ遊牧を基盤としてきたサーミの人々の伝統的な生活⁴⁾とサーミの工芸 duodji が互いに強く結びついてきたことを指摘する。また、duodji 教育やその促進のための組織化と制度化の流れを追い、duodji を巡る「真正性」の基準について記述する。それらを踏まえ、フィンランド、イナリでのフィールド調査と工芸家への聞き取りを提示する。工芸家からの聞き取りから窺えたのは、「ククサ」における「真正性」と、その基準を支えるフィンランドの森の危機、すなわち「自然と文化」のネットワークの揺らぎであった。

先住民アートと「真正性」

人類学の系譜において非西洋社会の道具や装飾品を「アート」と名付け、その芸術性に光を当てたのはアメリカの人類学者フランツ・ボアズ (Franz Boas) である。ボアズは先住民が作り出すモノをブリミティヴアートと呼んだ。彼は 1927 年の著書 *Primitive Art* (大村敬一訳『ブリミティヴアート』2011) において伝播主義的な手法をとり、美術における進化主義的な議論⁵⁾を批判しながら文化接触による模様の受容や作り手と形態に関する議論を展開した。この試みは、ものづくりやエージェンシーといった今日の人類学的な議論に通ずるものでもあり、ボアズは現代に続く芸術の人類学的アプローチの基盤を築いたと言える。

ボアズに影響を受け、非西洋のモノについて考察を深めたのは人類学者ジェイムズ・クリフォード (James Clifford) である。彼は 1988 年の著書 *Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art* (太田好信他訳『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』2003) において「モノを分類し、それぞれに価値の多寡を割り振る」(クリフォード 2003: 283) ための枠組みを芸術=文化システムとして図にしている。真正/非真正、傑作/器物の対立軸とそれらに挟まれた芸術/非芸術、文化/非文化の 4 つの意味とそれらを扱う制度や場を区分けした (図 1)。しかしクリフォード自身、このシステムは過渡的であることを強調していたことに留意したい (クリフォード 2003: 297)。「文化」と「芸術」という西洋的な概念や分類は単純に非西洋の民族やモノに拡張されうるものではないと自覚していたからである (クリフォード 2003: 298)。

クリフォードによる芸術=文化システムの提唱よりやや早い時期から、西洋美術が想定する「芸術」「美術」「アート」とは異なる流れの中に先住民芸術を捉える試みがなされていた。1950 年代にカナダのイヌイトのコミュニティーで調査したネルソン・グラバーン (Nelson Graburn) は「アート」というラベルでさえ「高い文明」のエリート主義的伝統を反映していると述べた (Graburn 1976: 3)。彼は編著 *Ethnic and Tourist Art* (1976) において「原始アート」や「部族美術」「民族アート/民族芸術」という概念は西洋社会の視点による分類であることを指摘し、先住民が生み出すモノはそれぞれが生活する社会において捉えるべきであることを述べた (岩崎 2014: 25, Graburn 1976)。これは「アート」という西洋社会中心的な枠組みを非西洋や先住民の芸術に押し付けてきたことを問い直す議論であった。この議論は「アート」という一つ concepts を、その他の多様な社会と一概に共有できないことや概念の広さなどの違いに目を向ける契機となったと言える。

4) サーミとトナカイ遊牧民は常にイコールであるとは限らない。サーミの中でもトナカイ遊牧をしてこなかった人々もいることに留意したい。

5) 例えば幾何学模様から具象的な模様に段階的に進化するという議論など。

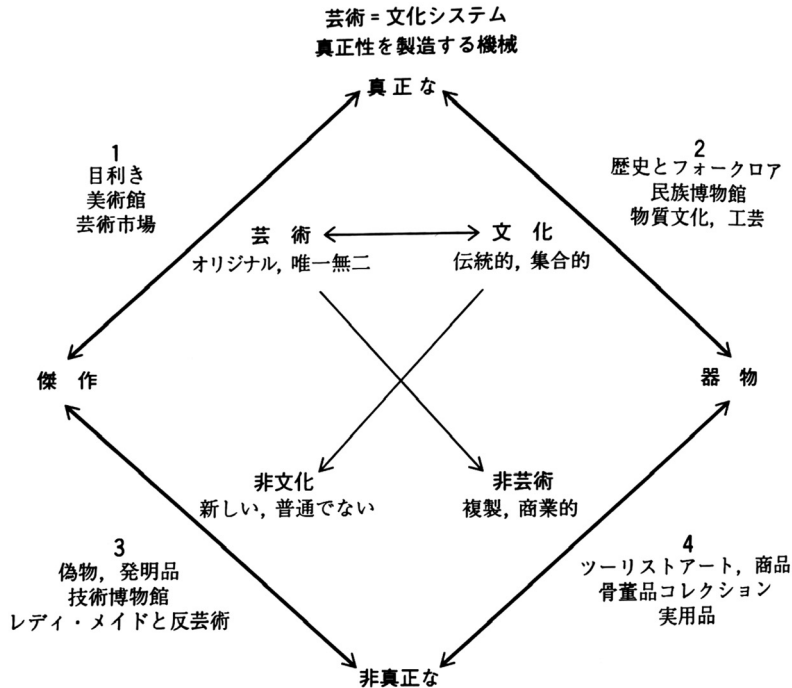


図1 芸術＝文化システム 真正性を製造する機械。(クリフォード 2003: 283) より抜粋。

サーミコミュニティにおいても先住民のアートは先住民自身の理論や実践に基づいて評価されるよりも、西洋の美術史と比較して文脈化されることが多いという指摘がなされてきた。これまで学術的な美術教育は西洋の歴史に基づいたものであり、美術史へのアプローチも西洋中心であった (Guttorm 2012: 181, Bydler 2017: 149)。それをうけ 1970 年代には「アート」を示す北サーミの概念 dáidda⁶⁾ が紹介されている。彼ら自身の概念を用いて、自らのモノを語るという取り組みである。また、北西海岸先住民の芸術にもみられるように先住民の芸術及び文化復興は先住民の権利回復運動と連動する形で促進されてきたという議論もなされてきた (齊藤 2016)。本稿で扱う duodji という概念も、これらの議論と並走する形で提唱され今に至る。20 世紀の先住民の芸術を彼ら自身の言葉を用いて、新しく、オリジナルで、真正で、再帰的なものとして認識することが可能になりつつある (Phillips 2017: 329)。このようなアプローチはこれまで一本化されてきた歴史あるいは美術史が複数化されていく動きとして捉えることができる。

これまで非西洋のモノは美術史の文脈においても土産物という認識が強かった。美術史における工芸の地位が高まっていく動きのなかでも、サーミの工芸 duodji は発展しておらず、観光客向けのものとして捉えられたという記述がなされている (Bydler 2017: 153)。また北西海岸先住民においては 1890 年ごろからカナダ政府や宣教師から観光用土産物の制作が奨励されたため、さまざまな作品が制作され、それがきっかけとなりアート制作の興隆に繋がる地域もあった (岸上 2015)。一

6) フィンランド語でアートを意味する taide を基盤とした言葉 (Aamold 2017: 15)。Dáidda と duodji は重なる点もあるが同じではなく、常にサーミのアートが工芸 duodji に結びつくとは限らない点に注意したい。

方、このように土産物が作られるなかで、非西洋のモノに対する「真正性」の問題が浮上していた。前述したクリフォードの芸術＝文化システム（図1）を見ると、民族博物館が所蔵するような文化的器物や美術館が所蔵する芸術作品は真正なモノとされ、土産物に代表されるツーリストアートや偽物などは非真正なモノとして体系化のなかにあることがわかる。このシステム自体が真正性を生み出す機械として提唱されている。「真正性」を巡る問題は、この時代から人類学にとって非西洋のモノや先住民アートを考える上で切り離せないテーマであった。

人類学における「真正性」の理解は大きく2つに分けられる。「真正性」が、あるモノに本質的に備わっており、専門家によって客観的に判定可能とする見方（客観主義的真正性）と「真正性」はモノではなくそれにまつわる言説に備わっており、社会的に構成され変化するという見方（構築主義的真正性）である（Handler 2001: 963-4, 田本 2023: 487）。客観主義的真正性においては、そのモノの性格や歴史的起源が基準となるが、1970年代以降の人類学においては「真正性」は本質的なものではなく、「西洋近代の文化的構築物」（Handler 1986: 2, 田本 2023: 487）とみなされていた。このことは、クリフォードが「芸術」や「文化」という西洋的な概念を単純に非西洋のモノに拡張できないことや、西洋的にまなざされたモノと場所による真正/非真正ではなく、非西洋の社会における文脈があることを指摘していたことと結びつく。「文化的あるいは芸術的な「真正性」は、過去や過去の客体化、保存、復興と同じくらい創造的な現在とかかわりがある」（クリフォード 2003: 282）という言葉からも、「真正性」はモノに宿っているというよりも、意味づけられ、配置されていくものという認識であることが窺える。

しかし構築主義的真正性に対しては、マテリアルな次元すなわち素材への関心が払われていないという批判や、現地の人々がいかにモノの価値を語り、行動しているのかという次元には関心が向けられてこなかったという指摘がなされている（田本 2023: 488 参照）。特に素材に関する指摘は、後述するように本稿が扱う白樺のこぶを用いる「ククサ」においても同様なことが言える。本稿では duodji を巡って「真正性」の基準がいかに提唱されてきたかを追うが、最終的にはフィールドの人々にとって「真正」な「ククサ」とはどのようなものとして語られるのかを基準とし、またそれを生み出す状況はいかにあるのかを記述する。

Sámi と Duodji

サーミ（Sámi）はノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアの4ヶ国の北方地域に住むヨーロッパにおける先住民族であり、彼らが伝統的に住んできた土地はサップミ（Sápmi）と呼ばれている。サップミは中央ノルウェー、中央スウェーデンからフィンランドの北部を超えロシアのコラ半島まで広がっている。サーミ人口は統計次第ではあるが6万人から10万人とされ、ノルウェーが最も多くのサーミ人口を抱えており3万5千人から6万人、続いてスウェーデンの1万5千人から3万人、フィンランドの約1万以上とロシアの約2千人とされている（Lehtola 2015: 10）⁷⁾。サーミは言葉の違いから9グループ（Ter Sámi, Kildin Sámi, Skolt Sámi, Inari Sámi, North Sámi, Lule Sámi, Pite Sámi, Ume Sámi, South Sámi 図2参照）に分けられ、サーミの中で最も人数の多い

7) しかし一概に人口を定めることはできない。もはやサーミの人口に関する正確な統計はなく、民族に関する質問はスカンディナヴィア4ヶ国の国勢調査ではおこなわれていないためである。1850年頃から1960年代初めまで厳しくおこなわれた同化政策によって多くのサーミが各国の多数派住民の文化を受け継ぐこととなったことやサーミの定義が揺らいでいることが影響していると言える（以上 Aamold 2017: 14）。

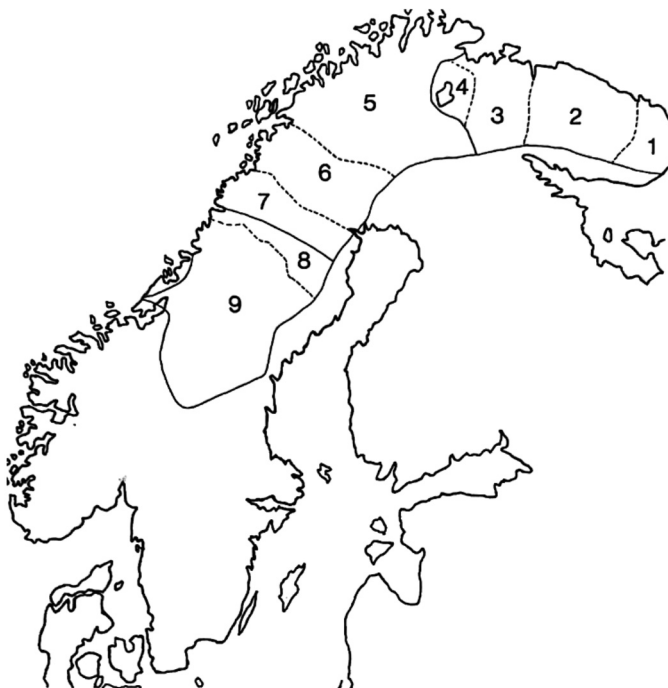


図2 サーミ言語別分布図。(Kuoljok & Utsi 2009 : 48) より抜粋。

グループはノルウェー、スウェーデン、フィンランドの3カ国にまたがる北サーミの人々である。

サーミにはトナカイ飼いのイメージが先行するが、サーミによる大規模なトナカイ遊牧が始まったのは支配国によって徴税が課された18世紀以降である。それ以前のサーミの人々も野生のトナカイを狩猟するためのおとり用トナカイ、荷物運搬用トナカイをもっていたが、生業の中心は漁撈、狩猟、採集であった(葛野 1990 : XI)。本稿が扱うサーミの工芸 duodji は、サーミの生活や環境、トナカイ遊牧との結びつきが強く、移動や日々の生活における実用性を備えている。トナカイの皮や角、骨、魚皮や魚の骨は人々が身につける衣服やバック、日常的に使うモノにも用いられてきた。

現在、duodji はサーミのアイデンティティの根幹をなしている (Bydler 2017 : 148)。今日、duodji という言葉は単にサーミの工芸という意味だけに留まらない意味の広がりを持っている。それは duodji がサーミの人々の生活に深く根差しており、サーミの生の一部であることに起因している。本章ではサーミ及び人々の生活と深く結びつく duodji の性質について紹介する。

伝統的で古いサーミ工芸 duodji の中心的な素材は木であり、白樺、松と唐檜である (Lehtola 2016 : 182)。白樺、唐檜、榛の木、柳の皮は染料として使われ、木の根は容器を作るために用いられてきた (Lehtola 2016 : 182)。本稿で注目する「ククサ」は白樺のこぶをくりぬいて作られるカップであるし、木の根で作る容器は特にスコット・サーミの文化において知られており、松の根を編んで角砂糖入れなどが作られている。木の素材の次に中心的な素材は「生の素材」、すなわちトナカイによる毛皮、なめし皮や角、骨である (Lehtola 2016 : 182)。トナカイの皮は衣服や靴、下に敷くマットとして用いられることもあれば、なめしてバックやポーチ、生地として使われ、角はプーッコ (puukko) と呼ばれるナイフの柄やカップの持ち手に使われる。魚皮や魚の骨もトナカイの皮と一緒にポーチにあしらわれることもあり duodji の素材となっている。

さらに他者との交易によるブロード生地やシルク、金属の銀や錫なども伝統的な素材とされており (Lehtola 2015 : 183)、それらを用いたサーミのカラフルな民族衣装や銀で作られた女性用のブローチといった duodji を目にしたことのある人も多いだろう。銀はブローチに加え腰の装飾に好んで付けられ、装飾だけではなくカップやネックレス、指輪などに用いられてきた (Lehtola 2015 : 184)。それまで用いていた植物や動物からの素材だけではなく、14 世紀から 17 世紀にかけて他国との接触や支配とともにヨーロッパの文化が飛び交う中でサーミの工芸は多くの新しさを獲得し、自らの文化を築き上げてきた。その中でグループや家族、地域ごとに異なる文様を継承し、民族衣装の帯や身の回りのモノに施してきたのである。

Duodji の素材の選択や形には意味があり、サーミの知恵が詰まったものでもある。それらはトナカイの飼育や日常的な移動の際にその実用性を発揮する。例えば「ククサ」と同じく白樺のこぶで作られるミルクボウル (náhppi) はトナカイから絞ったミルクを受けるカップだが、このカップの口は通常のカップよりも狭く、ミルクが容易にカップからこぼれないように機能する。またトナカイの皮で作られる靴の底はわざと毛の流れの向きを前方と後方で逆にして雪道でも滑らないような工夫がなされている⁸⁾。調査中に小耳に挟んだ「duodji は目で見える以上のモノ」という言葉は、素材との対話で生まれたモノや施された装飾の美しさだけではなく、使う中で発揮される duodji の性質を言い当てていた。Duodji 研究者ニルス・オスカル (Nils Oskal) は「intra-duodji 関係」という言葉で人とモノを結び付ける duodji の性質をあらわしている。Duodji は今でもサーミの人々の日常生活の一部を成しており、決して孤立しているわけではない。また duodji は形や文様を継承していくことで家族や地域、環境との関係をそのモノの中に留めるものであり、ひいてはサーミ社会全体を維持するために重要なものでもある。家族や地域、環境との結び付きは duodji の種類によって強弱があるだろうが、duodji は人やモノと結びつくことでコミュニティーや社会を支える力を発揮し続けてきた。

Duodji の制度化

Duodji はトナカイ経済との結びつきが強いと前述したが、1940 年代の終わりにはトナカイ産業や周辺地域に変化が生じており、トナカイのミルクなどの乳製品よりも肉製品が注目され始めていた (Oskal 2022 : 193)。このような変化は、それまで搾乳の際に用いられていたミルクボウルのような道具が必要とされなくなっていったことを暗示している。また、近代化によって新しい素材やモノがサーミコミュニティーに簡単に入ってくるようになると、duodji を作る機会が減り、その価値も著しく弱まってしまったと言われている (Magga 2018 : 18)。

このような変化に伴ってトナカイ経済から切り離された duodji の制度化が始まることとなった。Duodji の制度化に向けた動きや教育の始まりは 1940 年代に遡る。Duodji という言葉は早くから概念として使われてきており、サーミの工芸について話すためにノルウェー側のサップミの初等教育において、西洋美術的な手工芸から分けて認識され始めたときから積極的に利用されてきたようだ (Gaski & Guttorm 2017 : 138)。1942 年にスウェーデンのヨックモックに Samernas Folkhögskola (The Sami folk high school)⁹⁾ が設立され、duodji 作りの訓練はこの学校の核となる要素のひとつと

8) 同じように靴底のストッパーとなる工夫はアイヌの魚皮で作る靴にも見られる。アイヌの場合は靴底に魚のヒレがくるように作られる。

9) 現在の名称は Sámiij áhpadusguovdásj。スウェーデン宣教師協会の主導で 1943 年に設立された。この

なった (Oskal 2022 : 197)。この学校は Sámiij áhpadusguovdásj と呼ばれるようになった今日でも、duodji だけではなく、トナカイ飼育のようなサーミ文化に関する様々なことを学ぶことができる。1945 年設立の Same Ätnam (National Association of Samiland)¹⁰⁾ は duodji を作る人々が生計を立てられるように duodji 専門の委員会を設け、duodji 専門家のための役職を作った (Oskal 2022 : 197)。この機関の関心はスウェーデンの duodji における基準と教育的な問題であった。1960 年代、70 年代は世界の先住民が国を超えて自らの権利を求め立ち上がった時代であった (Gaski & Guttorm 2022 : 129)。同時期にサーミの間でもサーミアクティヴィズムが起り、モノという手段でサーミの生活や活動を示すことができるとして duodji が注目され、サーミの若者たちが duodji の制作に乗り出していた。1970 年代からはスウェーデンだけではなく、ノルウェーやフィンランドでも duodji に関する機関が設立された。1973 年設立のノルウェーの Sámi Instituttet (Nordic Sámi Institute) は duodji の促進に積極的で、サーミ自身が duodji で高等教育を受ける場を提供したり、duodji を取り巻く「真正性」に関わる問題に取り組んだ。また 1978 年には、フィンランドのイナリでも職業訓練学校として Saamelaisalueen koulutuskeskus (The Sámi Education Institute) が設立され、duodji の教育が始まった。Duodji の制度化は、duodji が文化の一部として生き続けるために重要な役割を果たしてきたのである (Magga 2018 : 18)。

このような duodji の組織化の背景には、duodji がそれまでのように個人や家族のために作られるのではなく、観光客にむけて生計を立てるために作られるようになったことが関係している。20 世紀前半のフィンランドのイナリ地域には、既に観光客が訪問しており、観光客にむけた土産物としての工芸品づくりが行われていた。トナカイ経済から離れた人々のなかには観光業に転身して生計を立てる人もいた。そのような観光というコミュニティにとって大きな動きのさなかに duodji を保護する必要性が生まれ、duodji に関する機関が設立されていったのである。また観光化とともに、サーミの土産物問題が浮上しており、duodji を取り巻く環境も変化しつつあった。特に「真正性」の問題は、今日のサーミコミュニティが抱える課題のひとつでもある。Duodji に関して言えば、duodji に類似したものやサーミのイメージを用いたモノが大量生産され、その「真正性」が揺らいでいる。サーミ地域の中でも特にフィンランドは、観光産業と「非合法的な」職人との間で最も問題を抱えていると言われており (Bydler 2017 : 141)、容易には解決できない問題となっている。特に白樺のカップ「ククサ」は duodji の「真正性」を揺るがすモノのひとつとして代表的なものである。

サーミコミュニティにおいて duodji の基準が設けられたのは、1940 年代後半のフィンランドやスウェーデンでおこなわれた展示やコンテストがきっかけであった (Magga 2018 : 63)。また、前述したスウェーデンのヨックモックに設立された Samernas Folkhögskola は duodji の基準をデザイン、素材、仕上げ、地域性など、様々な側面に対して定義した (Magga 2018 : 63)。さらに「真正性」の問題に取り組むためにサーミコミュニティによって提唱されたものが SÁMI DUODJI マークである (図 3)。このような商標マークを用いた文化のブランド化は、娯楽文化や市民社会の

組織はサーミに対する過去の虐待に対するキリスト教的な償いとして機能することを目的としていた。

- 10) サーミ文化を推進するためにつくられたサーミ機関であり、Sámi Duodji (サーミ工芸協会) の設立に携わった機関のひとつである。さらにこの機関は Samernas utbildningscentrum (サーミ教育センター)、定期刊行雑誌 Samefolket を発行している Samefolket 協会、ヨックモックのサーミ博物館やサーミ記念事業の設立に携わっている (Same Ätnam, <https://siwi.org/wp-content/uploads/2019/02/broschyr-same-atnam.pdf> 2024 年 4 月 5 日閲覧)。



図3 SáMI DUODJI マーク。「本物のサーミの手工芸とデザインを保証します」と書かれている。2024 年 11 月筆者撮影。

活動、政治や社会の歴史のようなあらゆる文化的要素によって形成され、人々が大切にしている文化の核となる価値や物事を表すものとして機能する (Magga 2018: 30)。Duodji はサーミ文化の中心に属するため、サーミコミュニティのコントロールのもとで duodji に関する教育や商売を維持する必要があった (Bydler 2017: 141)。「偽物」の土産物のような duodji へのネガティブな影響に対してサーミコミュニティからのコントロール材として用いられてきたものがこのマークである。このマークによってサーミコミュニティは一定の品質基準を設けて流通を制限するシステムを作った (Bydler 2017: 141)。

SÁMI DUODJI マークは 1980 年以降、北欧サーミ評議会 (後のサーミ評議会) による会議でサーミの工芸の真正性を保証する商標として、その導入を決定したことに端を発する (Magga 2018: 24)。1993 年にはサーミ工芸協会の Samesløjdstiftelsen (The Sámi Crafts Foundation) が SÁMI DUODJI マークに関するルールを制定し、フィンランド、ノルウェー、ロシア、スウェーデンに広まった (Bydler 2017: 141)。そこでの基準は、そのモノがサーミの職人によって、自然の素材を用いて作られたモノであり、皮の準備や彫り、刺繍、かご作りなど、特定の基準に従っていることにある (Bydler 2017: 141)。しかし、実際商品に付けられているマークに書かれているのは「本物のサーミの手工芸とデザインを保証します」という文言であり、前述したような素材や職人といった「真正性」の基準は買い手に対して明確に示されているわけではない。その理由は、このマークの管理はサーミ評議会がおこなうが、その使用や誰にマークを認めるかの決定は、各地の duodji 協会に任されている (Magga 2018: 49) ことにあるのかもしれない。つまり、このマークが示す「真正性」の基準は、これまでに大まかなルールは決められてきたものの、決して固定されたものではなく、買い手に対してその基準は明確に提示されているわけではないということである。

このマークとそれが保証する「真正性」はもっぱら買い手に向けて提示されているものであり、大量生産による「偽物」の製品との差別化を図るものとして働いている。このマークの製品を買う

ことで、買い手は作り手である duodjár やサーミコミュニティを支持していることを知るという売買の在り方が推奨されている。しかし一方で、工芸家の間でこのマークが忌避されることも珍しくはない (Vu 2022)。SÁMI DUODJI マークは伝統的な素材と技術を厳しく要求するため、文化遺産に本来備わっている創意工夫を閉じ込め、押しつぶしてしまう可能性も秘めているからだ (Bydler 2017: 145)¹¹⁾。さらに 1993 年の duodji のルールに従えば、作り手はサーミであると認知される必要がある。SÁMI DUODJI マークは誰がサーミであるのかというセンシティブな問題にも直結する¹²⁾。Duodji 自体は誰でも制作することができるが、SÁMI DUODJI マークはサーミとして認められた作り手のみに与えられる。ここでは duodji が制度化されることによって、一部のサーミを排除する仕組みが備わってしまっている。SÁMI DUODJI マークは自文化を守るはずが、内部での分断を引き起こす要因にもなっている。Duodji はサーミの人々の生及び生活の核にあるため、それが何かを定めようとすることは、サーミとは誰かを定めることと結びつく。それほど duodji とサーミ、すなわちモノと人の結び付きは強固なものであると言える。

「ククサ」

本稿では duodji の中でもフィンランドを含む北方諸国で古くから作られ、使われてきた「ククサ」を扱う。繰り返すが、今日世界的にはフィンランド語で白樺のこぶのカップを示す「ククサ」という名称が受け入れられている。しかし本稿で「ククサ」を括弧つきで表記するのは、サーミ地域においてこのモノを表す際、北サーミ語を用いて「guksi/グクシ」と呼ばれることもあるためだ¹³⁾。北サーミ語はサーミ語の中でも話者が多くメジャーであるが、実際には他のサーミ語にもそれぞれに白樺のこぶでつくるカップを示す言葉が存在していることに注意したい。例えばイナリ・サーミ語であれば「kukse/ククセ」である。前述したように、より中立的な呼び方としてはフィンランド語で白樺のこぶのカップを意味する「pahkakuppi/パフカクピ」、飲み物のカップ「juomakuppi/ユオマクピ」と呼ぶこともできるが、「ククサ」という言葉に定着した土産物のイメージを回避することはできても、フィンランド語とそれぞれのサーミ語の区別を乗り越えるわけではないため、本稿では名称への配慮の意をこめて括弧つきで「ククサ」と記す。

「ククサ」はラップランドだけではなく、フィンランドや北欧諸国またはバルト諸国¹⁴⁾においても代表的な土産物であり、手作りか工業製品か、白樺のこぶで作られているか、こぶではない木材から作られているかといった違いによって値段の幅も広い。また親しい人にプレゼントとして「ククサ」を送ることも一般的である。さらに贈り物としての「ククサ」については「ククサをもらった人は幸せになれる」という文言もあるが、この文言の出どころは確かではない。

今日「ククサ」はハイキングブームに伴って世界的にも知られるようになってきている。日本でも通販やスポーツショップで見かけることもあり、自作する人もいようで知名度とともにその需要も

11) サーミによってつくられた製品を示したいサーミまたはサーミ関連の会社は SÁMI MADE マークを申請することもできるようになっている。

12) 誰がサーミであるのかという問題は各国で基準が異なっており、言語と自己認識に関わる複雑な事柄である。本稿でこの問題は扱わないがサーミとして認められる基準に関する詳細は (小野寺 2018) を参照していただきたい。

13) 例えばフィンランドのロヴァニエミにある博物館アルティクムの売店では kuksa guksi と表記されて販売されている。

14) 2023 年 9 月にエストニアのタリンを訪れた際、土産物店で同じような木のカップを見つけた。

増えてきた。本来「ククサ」を作り、贈るという行為はゆっくりで、その分ローカルなコミュニティでの営みであったはずが、今日ではグローバルな流通にのり、価値とともに問題が生じている。その過程では duodji を巡る「真正性」の議論に見られるような「偽物」との差異化に関する課題が大部分を占めるが、調査を通して見えてきたのは、人々が語る「本物のククサ」のマテリアルな部分がグローバルな市場に圧迫されて変化を生み、「自然と文化」のネットワークに揺らぎが出ていることであった。

調査地

本研究調査地はフィンランドのイナリという地域で、主にイナリ・サーミの人々が暮らしてきた場所である。イナリの総人口は 2019 年で 6907 名、2020 年で 6861 名、そのうちのサーミ人口は 2019 年時点で 2141 名とされている¹⁵⁾。イナリにはサーミ文化センター Sajos やサーミ博物館 Siida、サーミ職業訓練学校 SAKK があり、Sajos にはフィンランドのサーミ議会の国会議事堂やサーミアーカイブがはいっていることから、イナリはフィンランドのサーミの文化、教育、専門知識の中心ともいえる。またイナリは毎年数十万人の人々が訪れる観光地でもある。オーロラを高確率で観ることができ、ウィンターアクティビティができる冬やフィッシングができる夏を中心に訪れる人が多い。

イナリを中心とするラップランド内での調査期間は 2022 年 11 月 4 日～11 月 17 日、2023 年 2 月 4 日～2 月 15 日、2023 年 8 月 24 日～9 月 1 日である。次章以降ではサーミ博物館 Siida の展示や調査地で売られている「ククサ」を紹介する中で、前述した「真正性」と SÁMI DUODJI マークに関わる現状を示し、他方でそれらを作る工芸家によるインタビューをもとに「自然と文化」との結びつきを提示する。

イナリでの「ククサ」

Duodji の中でも代表的な「ククサ」はイナリでもスーパー、土産物屋、博物館などで販売されており手に入れやすい。また、その場で手に入れることはできないが、工房で個別に注文して作ってもらうオーダーメイドも可能である。スーパー、土産物屋、博物館、工房での「ククサ」は主に材料の違いや SÁMI DUODJI マークが付けられているかいないかといった違いによって値段にも幅がある。本章ではまず「ククサ」を巡る現状を指摘するために、調査地で売られていたり、博物館で展示されている「ククサ」を紹介する。

イナリに来た観光客がまず訪れるのがサーミ博物館 Siida だろう。Siida はサーミ文化を専門とした国立博物館である。伝統的なサーミの暮らしとともに現在の活力あるサーミの文化を紹介しており、同時に人々の暮らしを支えてきた北極圏の自然に関する情報も提供している。この博物館はサーミ協会である Sámi Litto/Saamelastien yhdistys ry が 1959 年に設立した野外博物館を母体としている。博物館の設立と同時にコレクションの収集や野外博物館の建設が始まり、1963 年には北欧諸国で初めての独立したサーミ博物館として一般公開された。2022 年 6 月 1 日より新しい常設展「Enâneh láá mii párnááh-これらの大地は私たちの子どもたち」がスタートしている¹⁶⁾。

15) イナリ地区のホームページより参照。2019 年のサーミ人口の統計については、フィンランドのサーミ人口 10759 名のうちイナリ居住が 2141 名としている (INARI Facts and statistics, <https://www.inari.fi/en/information/statistics.html> 2025 年 1 月 30 日閲覧)。

Siida の展示には様々な duodji が展示されており、そのうち「ククサ」はサーミの duodjár であり、アーティストのオウティ・ピエスキ (Outi Pieski) によってガラスケースの中に制作年代に関わらずランダムに配置されている。展示されている「ククサ」の年代は1902年のものから1997年のものまであり、約100年を跨いでいる。この100年の間に制作段階における機械の導入やトナカイの角に装飾を施した柄をつけるといったモノ自体の変遷も見ることができる。展示されている「ククサ」とその年代を見比べてみると、特に1970年代以降の「ククサ」はそれ以前の厚みのある素朴なものとは対照的に機械の導入によって薄く、表面をなめらかに仕上げる現代の形に変わっていた。この時代の「ククサ」は細い彫りの装飾を施したトナカイの角を柄にはめ込み、カップの部分はむしろ独特なこぶの木目模様を見せるように、彫りなどの装飾は施さず、滑らかな断面を見せていた。機械の導入に加え、サーミの観光ブームや土産物としての「ククサ」の変遷がわかる展示になっていた。

博物館のミュージアムショップには duodji が売られており、「ククサ」はガラスショーケースの中におさめられている。ショーケースに入れられているような「ククサ」にはほとんど SÁMI DUODJI マークが付けられている。このマークによって、そこに並べられた商品は「本物」のサーミ工芸であることが示されていた。値段は400€ほどし、ショーケースには工芸家の名前が記されていた(図4)。

博物館の次に観光客が訪れるのはサーミ文化センターの Sajos かもしれない。Sajos には Duodji shop という SÁMI DUODJI マークの商品を扱う専門店がある。この店の母体は1975年に



図4 Siida のミュージアムショップで売られている「ククサ」。2022年11月筆者撮影。

16) Siida の HP より引用 (Siida, <https://siida.fi/en/exhibitions/permanent-exhibition/> 2025年1月30日閲覧)。

Sápmelaš Duoddjarat という名前で設立し、1997 年に Sámi Duodji ry と名前を変えたサーミ duodji 協会である。この協会はサーミの職人の職業団体として設立され、duodji を作る職人の技術を支えながら利益を伸ばすことを目的としていた (Magga 2018 : 51)。設立当初から duodji の販売が続けていたが、2018 年に Sajos 内に入ってからでは Sámi Duodji ry とは異なる団体が経営を担当している (Magga 2018 : 51)。Duodji shop には製品だけではなく、duodji の材料となる生地や糸、サーミに関する図書や CD など、観光客だけではなく地域の人々に対しても幅広い品ぞろいで販売している。ここにも SÁMI DUODJI マークつきの「ククサ」が 400€ ほどで売られている。

このように、博物館や文化施設では SÁMI DUODJI マークがついた「ククサ」が販売されている一方で、土産物専門店やスーパーに行くと、大量生産型の「ククサ」が雑多に並べられている光景を目のあたりにする。イナリには 2 店舗ほど土産物専門店があるが、一番大きな土産物屋は大通りに面しており、大型バスが店前まで観光客を連れてきている。この土産物屋では「ククサ」に限らず、トナカイの皮や角、夏の客のための釣り道具、トナカイや雪の結晶模様のついた衣類など、サーミ文化をモチーフとしたり、連想させたりする様々な土産物が並んでいる。ここにある「ククサ」は大小さまざまで、値段は 30€ ほどである。これらには SÁMI DUODJI マークはつけられていない。マークの有無が商品の値段にも反映されており、値段は一桁違う。土産物屋では「ククサ」を作る会社が作成したものを販売しており、商品棚に置かれていたパンフレットには「フィンランドの手工芸 本物の“へたくそが作る”ククサ」「本物の visakoivu のククサ」と書かれ、フィンランド語と観光客向けに英語、ドイツ語で使用方法の説明が書かれていた。土産物屋のものは一部白樺のこぶ、または伝統的に用いられていた色目の美しい visakoivu と呼ばれる白樺から作られているようだが、明らかに白樺ではない木材が使われているものもある。それらにはシャーマンドラムやエルク、鮭、山猫などのラップランドを思わせる焼き印がしてあり、柄の部分にはサーミによる「ククサ」に特徴的なトナカイの角ははめられていない (図 5)。

同じように、明らかに白樺のこぶから作られていない一般的な木材板から作られる大量生産型の



図 5 イナリの土産物屋の「ククサ」。2022 年 11 月筆者撮影。



図6 イナリのスーパーで売られている「ククサ」。2022年11月筆者撮影。

「ククサ」は近隣のスーパーにも並んでおり、こちらの値段は約13€である(図6)。SÁMI DUODJI マークと白樺のこぶから作られるカップを「ククサ」と呼ぶ視点から眺めると、このような「ククサ」は大量生産の「偽物」ということになるだろう。実際、スーパーに並ぶような「ククサ」は中国の工場からやってきたコピーであり、これらは白樺のこぶから作られたものでも、手作りのものでもない(Valta 2018)。しかし今日のフィンランドでは大型スーパーに行けばどこでも、この手の大量生産型「ククサ」が売られている。

イナリで目にする「ククサ」はもっぱら観光地であるイナリの、またはサーミ地域の土産物としての立場を占めている。土産物としての「ククサ」は、前述のようにサーミの duodji を巡る土産物問題の代表的な例とも言える。イナリという小さなコミュニティではあるが「ククサ」の値段の幅は広く、博物館、土産物屋、スーパーによって異なる価格と異なる種類の「ククサ」が売られている。博物館のような国や自治体が後ろ盾となっている公の施設で売られている「ククサ」ほど値段が高く、SÁMI DUODJI マークを用いてそのモノの「真正性」を示している。だが、土産物屋に並ぶ「ククサ」のようにマークは使用せず、「本物/authentic/aito」という言葉を用いてそのモノの「真正性」を示そうとする売り手もある。さらに「真正性」にこだわらないスーパーで売られているような安く手に入る「ククサ」も並存している。「ククサ」の「真正性」に関して、しばしばサーミコミュニティでもそれ以外のフィンランドの地域でも「本物」として語られる基準は、白樺のこぶから作られていることにある。これは、サーミコミュニティ外の人々とも共有できる素材の次元での「真正性」の基準である。土産物屋で売られている「ククサ」に「本物」という言葉が用い

られる理由は、その素材にあるのだろう。

一方 1993 年の SÁMI DUODJI マークのルールに沿えば、白樺のこぶであるという素材の基準に加え、サーミの duodjár によって作られたことに「真正性」の基準がある。「真正性」はどの立場から語るかによりその基準は変動するものであるが、調査内で語られた「ククサ」に関する主な基準は素材にあった。しかし今日のサーミコミュニティやフィンランドでは、人々がいう「ククサ」の「真正性」を担保する基準の素材が不足しているという状況が窺えた。次章では、イナリで個人経営をしている工芸家へのインタビューを紹介し、実際サーミの工芸家が「ククサ」を巡る現状をどのように眺めているのかを記述する。そこから見えてきたものは「真正性」を巡る問題が「自然」と密接に結びついていることであり、人とモノが生み出していく「自然と文化」のネットワークであった。

工芸家への聞き取り

工芸家への聞き取りをおこなったのは、イナリの Samekki という工房兼工芸店である。調査期間中に 2 度聞き取り調査のために訪問した。本稿の内容は一度目を通してもらった上で掲載している。Samekki の前身となる Samek Ky は銀の鍛冶職人であり、政治家、教師、サーミ工芸 duodji の活動家でもあるペッテリ・ライティ（Petteri Laiti/Mihku Biehtar）とパートナーが 1984 年に創設した工房である。次第に工房は Samekki という名前になり、現在創設者は引退し、その息子 S 氏と友人が 2015 年から経営を引き継いでいる。1970 年代、80 年代のフィンランドではサーミの民族意識とフィンランド社会の経済成長が同時に高まっていた時代であり、フィンランド北部のツーリズムの増加・土産物の販売が始まっていた（Magga 2022：204）。Samekki のスタートもこの流れにのっていたといえる。

S 氏はヘルシンキでコンピューター・サイエンスを学んだあとイナリに戻り、父親の工房を継いだ。工芸は小さい頃から父親に教えてもらっていたそうだが、多くの作品を作っていたわけではなかったそうだ。ヘルシンキから戻り、イナリの職業訓練学校で 2 年半固い素材を用いる duodji 制作の技術を学び、プロフェッショナルレベルの学位を得た。さらに 2 年半父親の下で見習いとして働き腕に磨きをかけた。Samekki が販売する伝統的な製品は基本的にオーダーメイドであり、材料も自ら森やトナカイ飼いかから手に入れているため、買い手は製品が出来上がるのを待たなければならない。初めて来店した際に Samekki で働いている工芸家の一人に「ククサ」について尋ねたところ「Laiti 家の伝統では森の中を歩いて、白樺のこぶを見つけ、例えば 5 年後に良い大きさになるという予測をたてる。」と言い、2 回目に来店した際のインタビューでは、実際に S 氏も自分自身が森でヘラジカ狩りをしているときなどに白樺のこぶを見つけたら地図などにチェックしたり、森をよく知るトナカイ飼いの友人から白樺のこぶをもらうと言っていた。

初回の訪問の際に、土産物屋で売られているような大量生産の「ククサ」の違いとしてまず言及されたのは軽さであった。「土産物屋で売っているククサは重い」ということだった。確かにこの工房で持たせてもらった表面が滑らかに仕上げられた SÁMI DUODJI マーク付きの「ククサ」は驚くほど軽かった。白樺のこぶで作るのは、こぶは固い素材であるために丈夫に薄く仕上げるができるからだそうで、ノマディックな生活をしていたサーミにとっては軽くベルトにつけて持ち運びに便利で実用であったということを教えて頂いた。前述したように、サーミの duodji には素材や形に意味が込められており、そこに人々の知恵を読み取ることができる。一方で現代の薄い「ククサ」は 1960 年代または 70 年代の機械の導入によってもたらされたものであるとも言え、この年

代は既にサーミは定住しているため、現代の「ククサ」の形をかつてのノマディックな生活に持ち込むことは適切ではないかもしれない。かつての生活では限られた道具のなかで、どれほど「ククサ」の軽さが重視されたかは定かではないが、固い素材であるために壊れにくかったり、長く使えるという点で白樺のこぶを使うことの実用性とサーミ知恵を垣間見ることができる。

Samekki では「ククサ」だけではなく、ナイフやジュエリーなど様々なものをオーダーメイドで作っている。S氏は自らが作ったモノに SÁMI DUODJI マークを付けて販売しているが、土産物屋に売られているような「ククサ」に対して必ずしも懐疑的というわけではない。インタビューの中では「土産物屋で売っているような安いカップが悪いとは思わない」と言っていた。「でも白樺のこぶでないと guksi¹⁷⁾ではない」とする。前述したように「ククサ」の「真正性」の基準は、S氏にとっても白樺のこぶという素材にある。このことはS氏に限らず、これまで筆者が調査をしたフィンランド人の工芸家たちの認識においても基本的に共通していることであった。

「ククサ」に用いる白樺のこぶの話をするなかで、S氏はその入手の難しさについて語った。自ら狩りをしたり、知り合いのトナカイ飼いかから白樺のこぶを得ているS氏であるが、白樺のこぶは常に手に入れることができるものではない上に、ちょうどよい大きさのこぶを見つけるのも難しい。彼の父であり、Samekki の創設者も近年、森で白樺のこぶを見つけることが難しくなったと言っていたそうだ。その理由はフィンランド北部の白樺の若さにあるとS氏は言う。フィンランド北部においては古い白樺の樹木が少ないことが影響している。白樺のこぶは白樺が何らかの傷をうけたときに樹木自身がそれを治そうとして作り出すものであり、樹木が育つと同じように、こぶもまた長い年月をかけて育つものである。白樺が十分に育たず、古い白樺の母数が少ない北部の森でこぶを見つけるのは難しく、その補充は追いついていない。また、S氏はフィンランド全体の森の現状についても触れた。針葉樹を中心に樹木の伐採を進めているフィンランド森林庁の取り組みは、骨や皮として duodji の材料にもなるトナカイの生息地を狭めてもいる。森の状況は巡り巡って、duodji の制作に影響を与えているのである。

S氏の話は duodji やそれを取り巻く「真正性」の問題が文化的領域に留められたものではなく、それを生み出す自然とも密接に関わっており、「自然と文化」が互いを構成しながら影響を与え合っているということを示している。白樺のこぶを用いる「ククサ」は世界的な需要の観点からも供給を補おうとする上で素材の不足は問題であり、ものづくりは「自然」の変化の影響を受けている。「ククサ」はまさに「自然と文化」を跨ぐ問題を抱えている。次章ではフィンランドの森の現状について記述しながら、「ククサ」が抱えている「自然と文化」を跨ぐ課題を提示する。

フィンランドの若い森

フィンランドは国土の約8割を森林で覆われている。フィンランドの人々にとって森は身近な空間である。しかしその森のほとんどは産業林であり、針葉樹が等間隔に植えられた歩きやすい森なのである。18世紀以降フィンランド経済を支えてきた林業は、皆伐と針葉樹の植樹を繰り返し今に至っている。歴史をふりかえっても、19世紀後半のフィンランドの経済成長は樹木の加工を行う製材産業が率いており、20世紀初頭には木材生産品は輸出全体の44%、林業と製紙業を含めて69%を占めていたとされている (Alapuro 1988:31)。フィンランドの樹木の生産は国の経済市場を支えただけではなく、国際的な役割をも担っていたことが窺える。

17) 前述の通り、北サーミ語で「ククサ」を意味する言葉。

現在のフィンランドの森はほとんどが18世紀から19世紀にかけての産業化以降に植林されたもので構成されている。近年、フィンランドの経済を支えてきた皆伐と植樹を繰り返す林業の在り方に警鐘が鳴らされ始めた。18世紀以降の林業の在り方について、当時の伐採は持続的成長が実現できるような森林管理どころか、自然な再生原則にさえも注意が払われておらず(ヨキランタ&ユンッティ他 2022: 62)、資源の有限性を意識しない「自然」の搾取がおこなわれてきていたことが明らかにされている。さらにこの林業システムを促進させたのは1939年から1944年に及ぶフィンランドとソ連間の冬戦争・継続戦争後の賠償金支払いだった。フィンランドは継続戦争後の和平締結において戦争賠償金の3分の1を木材製品でまかなったために国有地、私有地に関わらず広範囲における森林の強制的伐採が実施され、古い森が一気に姿を消す結果となった(ヨキランタ&ユンッティ他 2022)。それが今日の若いフィンランドの森の姿に繋がっている。つまりフィンランドにおいては、歴史は人々の生活だけではなく、それを支える「自然」の領域にまで影響を与え、その爪痕が現代まで続いてきたということである。

これまでの林業の在り方がフィンランドの森に大きなダメージと変化を与え、森の生態系だけでなく人々の生活にまで影響を及ぼしてきた。原生林や老生林の面積減少によって古い森にしかすむことのできないフクロウのような生き物たちは減少しており、樹木を早く成長させることで樹木の強度が下がり、建材につかえるような木材はとれなくなっている。フィンランド産の木材はパルプまたは紙づくりに使用されるか、木板を糊付けして強度を高めて使用されている。さらにS氏へのインタビューから見えてきたのは、フィンランドの森の状況が伝統的な工藝にまで影響を及ぼしている事実である。

フィンランドの森の現状と白樺のこぶの入手困難さとは対照的に「ククサ」の国際的な知名度は高まり、日本でもキャンプを趣味とする人々の間で「ククサ」はそのアイテムとして憧れの対象でもある。キャンプ用品が売られている棚には近年フィンランドからの「ククサ」も並ぶようになり、実際にキャンプをする人々の中には木材から「ククサ」を自作する人もいる。しかし、白樺のこぶを用いる「ククサ」の供給は国内外の「ククサ」需要に追いついていない。現在のフィンランドの森では、もはや白樺のこぶを入手することが難しいためである。

これまでこの問題は白樺のこぶを主に隣国のロシアから輸入することで対処されてきた。Samekkiのようなオーダーメイドの形をとる比較的ゆっくりな制作と販売購入では、まだ身近な森からの入手でまかなえている。しかし例えば2018年の情報では、フィンランドのラップランドにあるユリトルニオという町で年間1万個の「ククサ」を作っていた男性は隣国のロシアから取り寄せた10トンもの白樺のこぶを用いて「ククサ」を制作していた(Valta 2018)。その制作数は1日で30個というスピードであった。

フィンランドにとってロシアは貿易相手国として重要な存在である。ウクライナ侵攻前後のロシアからフィンランドへの最大の輸入品は2022年のデータでは石油製品、次いでニッケル、有機化合物や無機化合物、そして5番目に木材や木製品であった(TRADING ECONOMICS 2024)。しかし2022年ロシアとウクライナの戦争が本格化してからは輸入規制がとられ、EUは先にロシアからの木材や石炭の輸入を禁止したため、木材の輸入は停止、次いでフィンランドは2022年9月の段階で原油の輸入も停止した(BOFIT 2022)。2022年9月の段階でロシアからの輸入は前年から66%減少し、その割合は輸入全体の3%に落ち込んだ(BOFIT 2022)。フィンランドの貿易に占めるロシアの割合がこれほど低いのは第二次世界大戦を経験した1940年代以来だとされている(BOFIT 2022)。ロシアからの木材の輸入停止が伝統的な工藝である「ククサ」にももれなく影響を与えてい

るのである。フィンランドの森の危機は木材の輸入という形で隣国ロシアとの経済的なネットワークを生み出したものの、それは再度戦争という文化的な問題によって断ち切られている。伝統的な工芸である「ククサ」は今、ローカルとグローバルを跨ぐ「自然と文化」の繋がりの中で窮地に立たされているとも言えるだろう。

おわりに

本稿ではまず、人類学における非西洋のモノまたは先住民のアートに関する議論と「真正性」の議論を概観した。非西洋のモノや先住民アートを巡る人類学的議論は「真正性」の議論を同時に扱ってきたが、客観主義的真正性から構築主義的真正性という転換を踏まえ、モノが生まれる場を民族誌的に記述したり、より現地での価値の語られ方やモノを取り巻く人々の行為に注目しながら、人々の視点に近づくアプローチが取られてきた。

サーミコミュニティは教育機関や施設を通して duodji の技術を高め、さらに観光による「真正性」の問題に対しては SÁMI DUODJI マークを用いることでモノの価値を提示する取り組みをしている。しかし「真正性」の基準は明確ではない。本稿の「ククサ」に関しては、人々が語る「真正性」の基準は白樺のこぶという素材にあった。しかし工芸家への聞き取りを通して明らかになったのは、人々にとって「ククサ」の「真正性」を担保するはずの白樺のこぶが、今日のフィンランドの森では不足しているという状況であった。

ものづくりは本来緩やかな営みだったはずだが、観光化や林業の発展によってモノを作る土台となる自然環境は大きな影響を受けており、人々の暮らしと環境の変化は巡りめぐってものづくりにも影響を与えていた。「ククサ」の場合、白樺のこぶの不足を補うためにロシアから輸入をしていたが、戦争という国際的な問題によって、そのルートは絶たれてしまった。これらを通して見えてきたのは、国境を超えていく人とモノの流通であり、今日の duodji が抱える「真正性」とそれを支える「自然と文化」のネットワークの揺らぎであった。

一方で、サーミの duodji とフィンランドの伝統的な工芸の境目は明確ではなく、本稿ではその境目が工芸家によってどのように意識されているか、またはされていないかまでは踏み込めなかった。このことは工芸家たちが白樺のカップをどのように呼ぶか（フィンランド語の「ククサ」か北サーミ語の「グクシ」か、中立的な呼称の「バフカカップ/こぶのカップ」か）ということに関わっているようにも思われる。またこれまでのロシアからの木材輸入の恩恵を先住民として独自の権利をもつサーミがどのくらい受けていたのかは定かではない。このことは恐らく個人の工芸家や組織によって異なるため、今後、イナリの職業訓練学校などの大規模な施設での材料入手のルートを調査したり、その他の工芸家に話を聞く機会を作ることで補っていきたいと考えている。

謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援「フィンランドの手工芸「ククサ」を巡る人類学的研究」の援助を受けています。インタビュー調査にご協力頂いた Samekki の方々及びサーミ語のカタカナ表記について助言をくださった山川亜古氏に感謝申し上げます。

図・写真一覧

図1 芸術＝文化システム 真正性を製造する機械。(クリフォード 2003:283)より抜粋。

図2 サーミ言語別分布図。(Kuoljok & Utsi 2009:48)より抜粋。

図3 SÁMI DUODJI マーク。「本物のサーミの手工芸とデザインを保証します」と書かれている。
2024年11月筆者撮影。

図4 Siida のミュージアムショップで売られている「ククサ」。2022年11月筆者撮影。

図5 イナリの土産物屋の「ククサ」。2022年11月筆者撮影。

図6 イナリのスーパーで売られている「ククサ」。2022年11月筆者撮影。

邦文文献

岩崎まさみ 2014 「自己表象としての先住民アート」『北海道民族学』10: 23-37.

小野寺理佳 2018 「北欧3国のサーミ議会—現状と課題」小内透編『北欧サーミの復権と現状 ノルウェー・スウェーデン・フィンランドを対象に』東信堂 pp.49-69.

岸上伸啓 2015 「カナダにおける先住民アートの展開について」斎藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的転回と現代的課題』国立民族学博物館調査報告書 131: 23-44.

葛野浩昭 1990 『トナカイの社会誌：北緯七〇度の放牧者たち』河合出版.

クリフォード, ジェイムズ 2003 『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信, 慶田勝彦, 清水展, 浜本満, 古谷嘉章, 星埜守之訳 人文書院.

斎藤玲子 2016 「北西海岸先住民アートの歴史と現在」斎藤玲子編『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題』国立民族学博物館調査報告書 131: 187-194.

庄司博史 2020 「サーミ工芸品：土産物から美工芸品へ」『季刊民族学』44(1): 64-73.

田村うらら 2013 『トルコ絨毯が織りなす社会生活：グローバルに流通するモノをめぐる民族誌』世界思想社.

田本はる菜 2023 「オーセンティシティを成形する—第湾における先住民の織りと文化創意産業の事例から」『文化人類学』88(3): 486-504.

ボアズ, フランツ 2011 『プリミティヴアート』大村敬一訳 言叢社.

ヨキラント, A. & ユンッティ, P. 他 2022 『フィンランド 虚像の森』田中淳夫監訳 上山美保子訳 新泉社.

欧文文献

Aamold, S. 2017. Unstable Categories of Art and People. In S. Aamold, U. A. Jørgensen and E. Haugdal (eds) *Sámi Art and Aesthetics: Contemporary Perspectives*, pp.13-27. Aarhus University Press.

Alapuro, R. 1988. *State and Revolution in Finland*. University of California Press.

Bydler, C. 2017. Decolonial or Creolized Commons? Sámi Duodji in the Expanded Field. In S. Aamold, U. A. Jørgensen and E. Haugdal (eds) *Sámi Art and Aesthetics: Contemporary Perspectives*, pp. 141-162. Aarhus University Press.

Gaski, H. & G. Guttorm 2022. The Significance of Writings about Duodji for a Sámi Understanding of Duodji and of Life. In Gaski, H. & G. Guttorm (eds) *Duodji Reader Twelve essays on duodji by Sámi writers*, pp. 128-141. Davvi Girji.

Graburn, N. (ed) 1976. *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Fourth World*. University of California Press.

Guttorm, G. 2012. Duodji: A New Step for Art Education. *International Journal of Art & Design*

Education 31(2): 180-190.

- Guttorm, G. 2017. The Power of Natural Materials and Environments in Contemporary Duodji. In S. Aamold, U. A. Jørgensen and E. Haugdal (eds) *Sámi Art and Aesthetics: Contemporary Perspectives*, pp. 163-177. Aarhus University Press.
- Handler, R. 1986. Authenticity. *Anthropology Today* 2(1): 2-4.
- Handler, R. 2001. Authenticity, Anthropology of. In N. J. Smelser & P. B. Baltes (eds) *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences*, pp. 963-67. Elsevier.
- Kuoljok, S. & J. E. Utsi. 2009. *The Sámi People of the Sun and Wind* (trans) T. Rutschman. Åjtte—Swedish Mountain and Sámi Museum.
- Lehtola, V. P. 2015. *SAAMELAISET HISTORIA YHTEISKUNTA TAIDE*. Punsti
- Magga, S. M. 2018. *SAAMELAINEN KÄSITYÖ YHTENÄISYYDEN RAKENTAJANA* Duodjin normit ja brändit. University of Oulu. Dissertation.
- Magga, S. M. 2022. Meanings of Sámi Culture in the Brand Building of Duodji. In Gaski, H. & G. Guttorm (eds) *Duodji Reader Twelve essays on duodji by Sámi writers*, pp. 200-217. Davvi Girji.
- Oskal, N. 2022. The Character of the Milk Bowl as a Separate World. In Gaski, H. & G. Guttorm (eds) *Duodji Reader Twelve essays on duodji by Sámi writers*, pp. 192-199. Davvi Girji.
- Phillips, R. B. 2017. The Modern and the Modernist in Twentieth-Century Indigenous Arts. In S. Aamold, U. A. Jørgensen and E. Haugdal (eds) *Sámi Art and Aesthetics: Contemporary Perspectives*, pp. 327-330. Aarhus University Press.
- Vu, Ha Vy 2022. *LOCAL HANDICRAFTS AS AUTHENTIC TOURISM SOUVENIRS ENHANCING CULTURAL VALUES THROUGH STORYTELLING* Case: Finnish Lapland. Lapland University of Applied Sciences. Bachelor's Thesis.

インターネット記事等

- BOFIT (THE BANK OF FINLAND INSTITUTE FOR EMERGING ECONOMIES) 2022 Finland's trade with Russia has collapsed
https://www.bofit.fi/en/monitoring/weekly/2022/vw202249_4/ (2024年5月25日閲覧)
- Laula, Valta 2018 Yksi mies tekee 10 000 Lapin kuksaa vuodessa - kysyntä on niin kova, että enemmänkin menisi
<https://yle.fi/a/3-9989104> フィンランド国営放送オンライン記事 (2024年5月25日閲覧)
- Laula Valta 2022 Venäjän hyökkäyssodan erikoinen seuraus: Suomalaisten pahkakukksien valmistus loppuu kuin seinään
<https://yle.fi/a/74-20005176> フィンランド国営放送オンライン記事 (2024年5月25日閲覧)
- TRADINGS ECONOMICS 2024 Finland Imports from Russia
<https://tradingeconomics.com/finland/imports/russia> (2024年5月25日閲覧)

The Current Situation of Sámi Crafts Duodji: Focusing on the Cups made from Birch Burl

Yumi TANAKA (田中 佑実)

(Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

Duodji represents the craft of the indigenous Sámi people of the North. This term is used to describe Sámi crafts and handicrafts from their own perspective, which differs from the Western artistic paradigm, as also to refer to all items created by the *duodjár*, the artists creating Duodji. The Sámi are indigenous people residing across four countries: Norway, Sweden, Finland, and Russia. The Northern Sámi term, duodji, has actively been used to denote a unique concept, distinct from Western artistic handicrafts that experienced institutionalization in the 20th century. Among the various crafts comprising duodji, this paper focuses on “*kuksa*”, a Finnish word that describes a cup made from birch burl. Moreover, this paper describes the current situation and issues regarding duodji, based on research conducted in the Sámi region of Inari, Finland. In Anthropology, discussions of non-Western objects or indigenous art have developed along with discussions of “authenticity”. This paper focuses on the material used to create “kuksa” as a criterion of “authenticity” in the field. However, what emerged from the research was the current situation wherein birch burls that guarantee the “authenticity” of “kuksa” are difficult to find in the young forests of Finland today, and changes in people’s lives and nature in the modern era have also influenced the creation of “kuksa” today. This paper describes the place where “kuksa” is handled in Inari and reveals the “authenticity” surrounding it and the network of “nature and culture”.

